

指定された本を読んでくれてありがとうと、今年も私はまず思います。指定された本はみんな、中学生、高校生のみなさんにとって、けっして愉快で爽快な読書体験を与えてはくれないと思うからです。それでもみなさんは一冊の本を読み、自分と同世代のさまざまな女の子たちに会ったことでしょう。マララさんのように勇敢な女の子もいれば、学校にいけない子も、誕生を祝福されない子も、道具のように酷使される子もいます。多くの方が、その現状に驚き、怒り、そして、自分のめぐまれた環境に思いを馳せ、「知る」ことの重要さに気づいたと書いていました。「知る」ことができたから、読んでよかったという言葉に、私はとても感動し、また、みなさんの作ってくださる未来をたのもしく思いました。

中学生の部の中込蓮さんは、男の子として、こうした本を読むのも、感想文を書くのも、ちょっと抵抗があったのではないかと思います。異性のデリケートな問題だからです。けれど彼は真っ正面から本のなかの女の子たちと出会い、そして、男として自分は何ができるかを真摯に考え、その思いを書いてくれました。その姿勢に胸を打たれました。また、本を読んで疑問に思ったことを、ひとつひとつ自分で調べていく糸瑞紀さんもすばらしいと思いました。ボランティア活動に参加したり、寄付をするだけでなく、こうして調べ、理解していくことも、私たちにできることのひとつなのだと思います。そしてまた、安田都々さんの感想文の出だし、本からの引用文に私もはっとさせられました。自分に何ができるか考えるのは、かわいそうなだれかを助けるためではない。世のなかにたいして、自分がいやだと思うこと、そうじゃないと思うことを貫くことなのだと、あらためて考えさせられました。

また、多くの方が、「女性でも教育の受けられるこの国の私たちは幸福だ」と書かれていたなかで、ただひとり、日本における不平等について考え、書いた方がいます。米子佳蓮さんです。私たちは男性と平等に教育を受けられますし、そのことで命を狙われることはありません。けれども、では男性と女性がまったく同じ権利を持っているかといえば、そうではないというのが現実です。そのことは、社会では見過ごされやすいことでもあります。それをきちんと拾い上げ、ここに記した米子さんの感性を私はすばらしいと思います。また、伊藤可子さんは、学ぶことで世界が広がっていくことを、自分の体験を思い出しながら重ねて描き、とても印象深かったです。仲間愛梨さんの書かれた感想文は、率直で強い。男子同級生との会話や、母親との会話をとおして、私たちの生きる社会も、けっして「気楽」なわけではないのじゃないかと私は考えさせられました。ボランティア＝偽善、という考えは、なぜかこの国にずっと前からあり、今もあり続けます。大きな疑問です。なぜそうなのか、を考え、自分なりの言葉にし続けることもまた重要なのだと思います。

みなさんの感想文で、私も多くを気づかされ、考えさせられました。本を読んでくれて、それから、率直な言葉をぶつけてくれて、本当にありがとうございます。

岡田光世